

■ 昨年中の京都大學天文臺 ■

■ 概況報告 ■

器械については

子午儀例年の通り専ら時刻觀測に用ゐられた。

但し此の器械は始め、子午儀室の東臺に置かれてあつたが、九月に西臺上に移されて其の跡に測地學委員會の子午儀が据ゑられた。

測地學委員會所屬の子午儀は九月まで天頂儀室内に置かれ、年の初め頃、百濟理學士が佐々木慧星の比較星觀測をした。八月と九月まには山本助教授は之れに依つて白鳥座第三新星の赤經赤緯の觀測をした。其の結果は

赤經一九時五五分二四・六四一秒 (一九二〇)

赤緯北五三度二四分二・一秒 (年春分點)

九月末に、天頂儀室を十時反射鏡に譲つて子午儀は子午儀室の東臺に移された。其後は時刻觀測に用ゐられてゐる

經緯儀何にも用ゐられなかつた。

七時赤道儀例によつて山本助教授が變光星觀測に用ゐ、又二、三、四月には火星の觀測した。五月二十五日夜、百濟理學士は之れで

テンペル慧星を發見、六月中此の慧星の觀測を續けた。夏八月には山本助教授が旅行から歸つて、百濟理學士と共に又此の慧星を數回觀測した。八月末から九月へは山本助教授が白鳥座新星の寫眞及びスペクトル寫眞を撮つた、其數二十枚。

四時赤道儀例によつて山本、古川、中村諸氏が變光星を觀測した。

又、年初は佐々木氏、年末には山本氏が慧星搜索に用ゐた。尙又晝間は山本、川崎兩氏が太陽黒點の觀測に用ゐた。三月大黒點群發見。

十時反射鏡は九月新着、十月元の天頂儀室に据付、其の十五日から山本助教授が専ら變光星の觀測をした。

太陽鏡は九月鹽田氏來任と共に太陽寫真撮影に活動した。十一月初めに出了大黒點も之れによつて發見された。

人員については

新城教授は擔任の講義課目は

力學通論 力學大要 宇宙進化論

四月初旬東京に出張、九月からは學術研究會議のため數回東京。

十月同會の天文學部副部長となる。

山本助教授は擔任の講義課目は

星學通論 (一年間每週二時間乃至三時間)

誤差論 (九月より年末まで每週二時間)

天體觀測指導 (每週一回)

ヘリオグラフィ (臨時講義、五時間)

四月初旬東京に出張、日本數學物理學會に On the Total Mass of Minor Planets を發表。五月末より七月まで文部省測地學委員會

囑托として新潟縣下に出張、前年よりの繼續として重力偏差觀測を行ふ、測點數百〇一點。

二月より五月まで火星觀測。八月テンペル慧星觀測。八九月白鳥座新星寫眞觀測。變光星觀測數三三九回。十月米國 A.A.V.V.O. 會員に推薦せらる。

佐々木助手例の如く時刻觀測。年初に變光星及び火星木星觀測

六月病氣歸省

古川助手は十月十五日新任。

變光星及び流星觀測、十一月米國 A.A.V.V.O. 會員に推薦せらる

百濟理學士は研究の傍ら五月二十五日東天にテンペル慧星發見、其の後數回同慧星を觀測。

九月大學院を退學。

天文同好會は山本、古川兩氏等發起して九月創立、會員を募り、隨

時講演をなし十月より「雜誌」天界を發刊。年末會員總數五百五十

一名。(詳細は略す)